

2022年度 八戸学院大学

地域経営学科・人間健康学科・看護学科

一般選抜（I期）

国語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
2. 筆記用具は黒色の鉛筆またはシャープペンシルを使用すること。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁に気付いたときは、手を挙げて監督者に知らせること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよい。
5. 問題冊子は持ち帰ってよい。

【I】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、一部表記を改めている所がある。

槍が利か、太刀が利か。

これは、いつも、議論になることだったが、槍の者にいわせると、

「戦場では、平常の小技の稽古などは、役には立たぬ。武器は、体に扱える程度に、長いほど利である。殊に、槍には、突く手、撲る手、引く手の、三益がある。槍はまた闘いに損じてても、太刀の代りがあるが、太刀は、折れたり曲がったりしたら、それ限りではないか」

1 太刀の利を説く者は、

「いや、われわれは戦場だけを武士の働き場所と考えていない。常住坐臥、武士は太刀をたましいとして持っている。太刀を習練するのは、常に魂を研いでいることになるゆえ、戦場で多少の不利はあっても、太刀を本位として武芸はみがくべきだと心得る。その武道の奥義に達しさえすれば、太刀によって得た練磨も、槍をとれば槍に通じ、鉄砲を持てば鉄砲に通じ、決して①ミジクな不覚はあるまいかと存じます。一芸万法に通ずとか申しますれば」

これは、果てしない問題になりそうである。忠利は、どっちへも②カタンせず聞いていたが、太刀に利があると、力説していた松下舞之允という若侍へ、

「舞之允。今のは、どうもそち自身の口吻でない所があるぞ。誰の請売りだと、いった。」

舞之允は、むきになって、

「いえ、てまえの持論で」と、いったが、

「2 だめじゃ。わかる」

と、忠利に観破されて、

「実はいつぞや、岩間角兵衛いわまかくべえどのの、伊皿子のお住居へ招かれた節、3同じ議論ぎろんがわき、居合せた佐々木小次郎こじろうと申す、その家の懸り人（注）から聞いたことばでございます。しかし、てまえの平常の主張と一致しておりますので、てまえの考えとして、申し上げた次第で、他を偽るつもりはございません」
と、③ハクジョウウした。

「それみい」

忠利は、苦笑しつつ、胸のうちで、ふと、4藩務はんむの一つを思い出していた。

それは、かねて、岩間角兵衛から推挙している―佐々木小次郎という人間―を召抱めしかかえるか、否か、聞きおいてあるまま、いまだに宿題として、決めかねていたことである。

推薦者の角兵衛は、

（まだ若年ゆえ、二百石を下し置かれれば）

と知っているが、5問題は禄高ろくたかではない。

一人の侍を養うことが、いかに重大か。殊に新参を入れる場合においては、なおさらであることは、くれぐれも、父の細川三斎からも、彼は教えられていた。

第一が、人物である。第二が、和である。いくら欲しい人間でも、細川家には、細川家の今日を築き上げた譜代（注）がいる。

一番を、石垣いしがきにたとえていうならば、いくら巨大な石でも、良質な石でも、すでに垣となって畳まれている石と石との間に、組み込める石でなければ使えないのである。④キントウのとれない物は、いかに、それ一個が、得難い質でも、藩屏はんぺいの一石とするわけにはゆかない。

天下には、あたら、そういう角が取れないために、せっかくの偉材名石でありながら、野に埋れている石が限りな

くある。

ことに關ヶ原の乱後には、たくさんあるはずであった。けれど、手頃でどここの垣へでもはまるような石は、抱える大名がその多いのを持て余し、これはと思う石には、圭角(注3)があり過ぎたり、⑤ダキヨウがなくて、自己の垣へはすぐ持って来られないのが多かった。

そういう点で、小次郎が、若年者であつてしかも優れているということは、6細川家へ仕官するには無難な資格であつた。

まだ、石とまではならない、若い未成品だからである。

吉川英治『宮本武蔵』

(注1) かかりびと。客のこと。(注2) ふだい。代々仕えている家臣のこと。(注3) けいかく。かどかどしさ。

問一 傍線①と⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線1「太刀の利を説く者」はどのような理由で太刀に利があると考えているのか。

あは四字で、い は二字で文章中から抜き出し、う は文意が通じるように八字以内で書きなさい。

武士の あ である太刀を習練することは、精神を い 鍛えることになり、そのことは太刀だけでなく う を使う場合にも力を発揮することにつながるから。

問三 傍線2「だめじゃ、わかる」という忠利の言葉は、どのようなことが「わかる」というのか。具体的に六十字以内で書きなさい。

問四 傍線3「同じ議論」とはどのような議論か。「…という議論」にあてはまるように十字で抜き出して書きなさい。句読点も一字と数える。

問五 傍線4「藩務の一つ」とは何か。文章中の言葉を用いて三十字以内で具体的に書きなさい。

問六 傍線5「問題は禄高ではない。」とあるが、それではどのようなことが大事だというのか。文章中の言葉を用いて六〇字以内で書きなさい。

問七 傍線6について、佐々木小次郎が「仕官するには無難な資格」と言えるのはなぜか。あは文章中から二字で抜き出し、いは文意が通じるように五字以内で書きなさい。

佐々木小次郎は、優れた人物でありながらまだあので、自分の考えを押し通そうとする頑固さがなく、周囲の人にあわせいやっていけると考えられるから。

【Ⅱ】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。中略以降の「」の部分はアインシュタインの言葉である。なお、一部表記を改めている所がある。

近頃パリに居る知人が、1アレキサンダー・モスコフスキー著『アインシュタイン』という書物を送ってくれた。「停車場などで売っている俗書だが、退屈しのぎに」と断ってよこしてくれたのである。

欧米における昨今のアインシュタインの盛名は非常なもので、彼の名や「相對原理」という言葉などが色々な第二次的な意味の流行語になっているらしい。ロンドンからの便りでは、新聞や通俗雑誌くらいしか売っていない店先にも、ちゃんとアインシュタインの著書だけは並べてあるそうである。新聞の漫画を見ていると、野良のむすこが親爺の金をごまかしておいて、これがレラチヴィテイ^(注)だなどと済ましているのがある。こうなってはさすがのアインシュタインも苦い顔をしている事であろう。

我国ではまだそれほどでもないが、それでも彼の名前は理学者以外の方面にも近頃だいぶひろまってきたようである。そして彼の仕事の内容はわからないまでも、それが非常に重要なものであつて、それを仕遂げた彼が非常に優れた頭脳の所有者である事を認め信じている人はかなりに多数である。そうして彼の仕事のみならず、彼の「人」について特別な興味を抱いていて、その面影を知りたがっている人もかなりに多い。そういう人々にとってこのモスコフスキーの著書は甚だ興味のあるものである。

モスコフスキーとはどういう人か私は知らない。ある人の話ではジャーナリストらしい。自身の序文にもそうらしく見える事が書いてある。いずれにしても著述家として多少認められ、相当な①ガクシキもあり、科学に対してもかなりな理解をもっている人である事は、この書の内容からも了解する事が出来る。

この人のアインシュタインに対する関係は、一見ボスウェルのジョンソン、ないしエッカーマンの②ゲーターに対するようなものかもしれない。彼自身も後者の類例をある程度まで③シヨウニンしている。「琥珀の中の蠅」などと自分

で言っているが、単なるボスウェリズムでない事は明らかに認められる。

時々アインシュタインに会って雑談をする機会があるので、その時々注の談片を題目とし、その注釈や祖述、あるいはそれに関する評論を書いたものがまとまった書物になったという③テイサイである。むしろ記事の全責任は記者すなわち著者にあることが特に断つてある。

人の談話を聞いて正当にこれを伝えるという事は、それが精密な科学上の定理や法則でない限り、④ゲンミツに言えは3ほど不可能なほど困難な事である。たとえ言葉だけは精密に書き留めても、その時の顔の表情や声のニュアンスは全然失われてしまう。そしてある人の云った事を、その外形だけ正しく伝えることによって、話した本人を他人の前に陥れることも揚げることも勝手に出来る。これは無責任ないし悪意あるゴシップによって日常行われている現象である。

それでこの書物の内容も結局はモスコフスキーのアインシュタイン観であって、それを私が伝えるのだから、更に一層アインシュタインから遠くなってしまう、4甚だ心細い訳である。しかし結局「人」の真相もア相対性のもかもしれないから、もしそうだとすると、この一篇いっぺんの記事もやはり一つの「真」の相かもしれない。そうでない場合でも、何かしら考える事の種子くらいにはならない事はあるまい。

余談はさておき、この書物の一章にアインシュタインの教育に関する意見を紹介論評したものがある。これは多くの人に色々な意味で色々な向きの興味があると思われるから、その中から若干の要点だけをここに紹介したいと思う。アインシュタイン自身の言葉として出ている部分はあるべく忠実に訳するつもりである。これに対する著者の論議はわざと大部分を省略するが、しかし彼の面目を伝える種類の記事は保存することにする。

…中略…

「数学嫌いの原因が果して生徒の無能にのみよるかどうだか私にはよく分らない。

むしろ私は多くの場合にその責任が教師の無能にあるような気がする。大概の教師はいろんなくだらな問題を生徒にしかけて時間を⑤クウヒしている。生徒が知らない事を無理に聞いている。

本当の疑問のしかけ方は、相手が知っているか、あるいは知りうる事を聞き出す事でなければならぬ。それで、こういう罪過の行われるところではたいがい教師の方が主な咎とがをこうむらなければならぬ。

学級の出来栄できばえは教師の能力の尺度になる。いったい学級の出来栄えには自ずから一定の平均値があつてその上下に若干の出入りがある。その平均が得られれば、それでかなり結構な訳である。しかしもしある学級の進歩が平均以下であるという場合には、悪い学年だというより、**A** 先生が悪いといった方がいい。大抵の場合に教師は必要な事項はよく理解もし、また教材として自由にこなすだけの力はある。**B** それを面白くする力がない。これがほと

んどいつでも禍わざわいの源になるのである。先生が退屈の呼吸（いき）を吹きかけた日には生徒は窒息してしまう。5教える能力というのは面白く教える事である。どんなイ抽象的な教材でも、それが生徒の心の琴線に共鳴を起させるようにし、好奇心をいつも活かしておかねばならない。」

これは多数の人にとって耳の痛い話である。

寺田寅彦 『アインシュタインの教育観』

(注1) レラチヴィテイ：リラテイヴィテイ。相対または相対性。(注2) 「単なるボスウェリズムでない」：ボス

ウェルは、伝記文学『サミュエル・ジョンソン伝』の著者。そのボスウェルを単に模倣したただけのものではないという事。

問一 傍線①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線1はどのようなことが書いてある書物か。文章中から一文を抜き出し、初めの五文字で書きなさい。

問三 傍線2「ゲート」の作品を次の中から選び記号で書きなさい。

イ、『赤と黒』 ロ、『ハムレット』 ハ、『レ・ミゼラブル』 ニ、『若きウェルテルの悩み』
ホ、『戦争と平和』

問四 傍線3「ほとんど不可能なほど困難な事である」とあるが、どのようなことが、どのような理由で困難だと言っているのか。
あは文章中から二字で抜き出し、
いは文意が通じるように文章中の言葉を用いて二十字以内で書きなさい。

人の談話を聞いて にその内容を伝えるという事が、
 ことができないため非常に難しい
ということ。

問五 傍線4 「甚だ心細い」とあるが、どういうことが心細いというのか。文章中の言葉を用いて具体的に二十五字以内で書きなさい。

問六 傍線ア「相対」・イ「抽象的」それぞれの対義語を書きなさい。

問七 空欄A・Bに入る適当な語をそれぞれ次の中から選び、記号で書きなさい。

イⅡだから ロⅡそして ハⅡむしろ ニⅡなぜなら ホⅡしかし

問八 傍線5 「教える能力というのは面白く教える事である」とあるが、「面白く教える」、または「生徒にとって退屈ではない、面白い授業」にするためには、あなたならどのようなことを意識したり、工夫したりして授業をすればよいと思いますか。あなたの考えを百字以内で書きなさい。